

シテリアのホテルにて  
写真提供：佐伯泰英事務所



# 佐伯通信

2018年5月(平成30)  
第43号  
発行 佐伯泰英事務所  
担当/新潮社  
禁・無断転載

## 二十年目に思う

後期高齢者と呼ばれるようになって一年が過ぎた。それ以前となりが変わったということはないが、七十年代に入ってから記憶力が落ちたことだけは確かだ。執筆中の登場人物がなんという名であったか、忘れるなんてことはしばしばだ。私流の文庫書下ろし時代小説の書き方はこうだ。一卷五

章二十節で物語の起承転結がつくように定型化して一節を一日分のノルマと決めた。休みなしで執筆すれば、二十日で脱稿することになる。むしろ『古着屋総兵衛』シリーズのように長編固定の例外もあるが、大体は一作二十日で脱稿と豪語(本来早書きなんて威張れる話ではない。小説の質的低下は否めないからだ)してきたが、こんな書き方は体力あるいは体調が伴ってできたことだ。記憶力の低下は、想像力の衰えをもたらした。執筆量の減少につながった。そんなわけで数年前よりシリーズの完結を進めてきた。

## 佐伯泰英 / 近刊のお知らせ

8月 3日	7月 10日	6月 15日
12 『夏の雪』 《文春文庫》 新・酔いどれ小籐次	11 『椿落つ』 《文春文庫》 新・酔いどれ小籐次	《双葉文庫》 空也十番勝負 青春篇 『異郷のぞみし』

「佐伯通信」第44号が入ります。  
(初版の初回出荷分にのみ挟み込み)

※発売日は予定です。

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。  
<http://www.saeki-bunko.jp> 佐伯泰英 ウェブサイト 検索

2018年の「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと発行いたします。  
(株)新潮社、(株)文藝春秋、(株)角川春樹事務所、(株)双葉社、(株)光文社

## 花より〇〇

新潮社 新潮文庫編集部 佐々木勉  
「古着屋総兵衛影始末」「新・古着屋総兵衛」担当



佐吉でございます。『新・古着屋総兵衛第十六巻 敦盛おくり』ご購入ありがとうございます。作中、総兵衛様・桜子様のご両人が忠吉・平十郎の凸凹コンビを従えて、品川は御殿山に葉桜見物に出かけるところがございます。というわけで、早速、佐吉も御殿山に出かけて参りました。



京急「新馬場」駅から目黒川沿いに歩きます。沢庵和尚の東海寺を右手に見て、居木橋で北側の御殿山通りという急な坂を上っていきます。15分くらいでしょうか、切り切ったところがもう御殿山です。翡翠原石館、原美術館、

ミャンマー大使館などがあって、御殿山庭園で一気に視界が開けます。この日は、八重桜はしっかりピンクの花びらを咲き誇らせていましたが、染井吉野はもう葉桜でした。その落ちた花びらが小径を覆い、これがまた風情がございました。

その後、品川神社に参りました。脇社の阿那稻荷神社で幾つもの赤い鳥居を潜ると、「一粒萬倍の泉」にたどり着きます。銭洗いですね。五百円玉を洗わせていただきました。

五百の萬倍はといえば……、ご、ごひやくまんえん！ あざっす！



『狩り』、『酔いどれ小籐次』、『交代奇合伊那聚異聞』、『居眠り聲音 江戸双紙』そして、今回完結をした『鎌倉河津捕物控』とこれも十巻を超えるシリーズばかりだ。「居眠り」のように五十一巻なんて化け物シリーズもある。どんな世界にも勢いで活動する時期は限られておろう。出版界も旬は十年」というのが定説のようだ。文庫書下ろし作家のわたしに「旬」が存在したかどうかはわからないが、ともかく時代小説に転じて二十年目を迎えた。そして、後期高齢者入りだ。

老化の度合いは個人差があると思う。だが、「死」を人間等しく迎えるように「若い」も必ずやってくる。わたしの場合は、七十年代に入ってから意識し始めた。早書きで完結したシリーズを存命のうち手直ししたいという願望はある。五十一巻もあるシリーズだと読み直すだけで何か月もかかる。いくつシリーズに手が入れられるか、「死」との競い合いになった。早書き小説家にも悩みはある。

## 六代目 齋沢総兵衛の冴えわたる智謀と剣技

新潮文庫 100年 特別書下ろし作品  
**光圀 古着屋総兵衛 初傳**

《影始末シリーズ》決定版・全11巻  
**古着屋総兵衛影始末**

1 死闘 2 異心 3 抹殺 4 停止 5 熱風  
6 朱印 7 雄飛 8 知略  
9 難破 10 交趾 11 帰還

新潮文庫